

平成28年度におけるチャネルキャットフィッシュの捕獲状況

臼杵 崇広

1. 目的

近年、県内で捕獲事例が増加しているチャネルキャットフィッシュの対策を講じるうえで、その捕獲情報を取りまとめる必要がある。

2. 方法

平成28年度に、水産試験場に寄せられた本種の捕獲情報を地図上に記載した(図1)。

また、生息量の指標として延縄の針100本あたりの本種の捕獲尾数(以下、捕獲尾数という。)を漁獲日誌により①南湖、②黒津、③関津、④大石淀の4区域で算出した。

3. 結果

平成28年度には北湖(琵琶湖大橋より北の琵琶湖。)で5尾、瀬田川(本報告では、瀬田川洗堰下流の県境までの瀬田川とする。)では17尾が捕獲されたが、南湖(本報告では琵琶湖大橋から瀬田川洗堰までの間とする。)では捕獲されなかった(図2)。北湖での捕獲は平成13年度、同15年度の各1尾以来で、複数尾捕獲されたのは初めてであった。一方、南湖では平成19年度に初めて捕獲された後、平成24年度以降には毎年捕獲されていたが、今年度は捕獲されなかった。また、瀬田川では平成20年度以降毎年捕獲されているが、平成26年度の35尾から減少傾向にある。

平成28年度は北湖で複数尾捕獲されたうえ、そのうちの2尾は沖曳網での捕獲であり、水平方向だけでなく鉛直方向にも分布範囲を拡大している可能性が考えられることから、引き続き本種の動態に関する情報収集に努めるとともに、駆除対策の強化が必要である。

平成28年4~8月の本種の捕獲尾数は①0尾、②0尾、③0.20尾、④0.20尾であり、前年同期と比較すると、①0尾を除いていずれの区域も②1.18尾、③0.50尾、④1.35尾よ

り減少した(図3)。また、平成28年9~10月の②黒津の捕獲尾数は1.67尾と前年同期の2.14尾より減少した。

瀬田川では生息個体の大型化に伴う延縄の損傷などによる捕獲数の減少に加え、主要漁場において例年捕獲が好調な時期にカワウ駆除などで捕獲できなかったことが平成26年以降の捕獲率の低下につながっていると考えられた。

このため、今後瀬田川では生息量の指標として、延縄に加えて、比較的捕獲が容易な釣りによる捕獲データの使用についても検討していく必要がある。

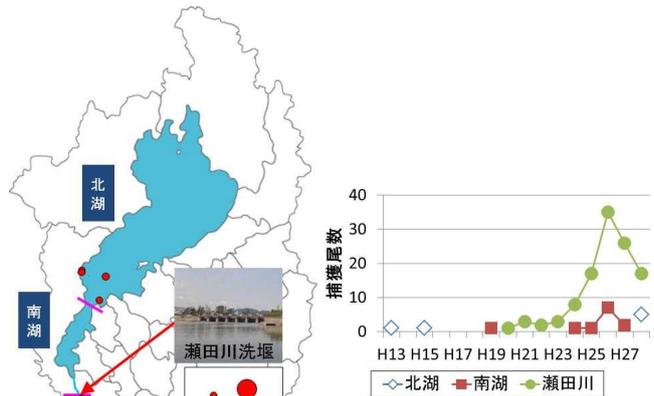


図1 チャネルキャットフィッシュの捕獲地点

図2 チャネルキャットフィッシュの捕獲状況

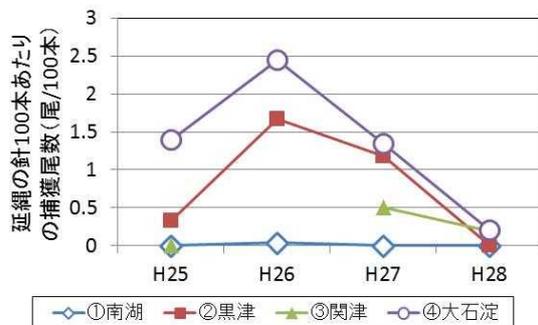


図3 各区域のチャネルキャットフィッシュ捕獲尾数の推移